

# 訪問看護実習において学生が捉えた“家族”—実習記録を通して—

## How Students Understand “Family” through Visiting—Nursing Practice (Analyses of Students’ Reports)

前在宅看護実習非常勤講師 神田りつ子  
成人・老年看護学 落合 清子

### 【要旨】

訪問看護実習の中で学生は家族をどのように捉えたのかを明確にし、教育方法の方向性を探るため、実習記録を分析した。その結果、6つのカテゴリーが抽出された。①家族の価値観が介護に大きく影響している。②家族関係というものが重要な環境の一つとなる。③家族はセルフケア機能とセルフケア能力を持っている。④家族以外の支援を必要としている。⑤家族はそれぞれの発達段階や課題を持っている。⑥家族は介入に対して複雑さを呈している。

この6つのカテゴリーは、「家族ダイナミクスとは、個々の家族成員が相互に関連し合い、その相互関連性が新たな機能を生み出したり、逆に機能を低下させるというように常に変化し続ける動的な存在」<sup>1)</sup>とした時にそれを形成していく要素だと考える。1つ1つのカテゴリーが円滑に相互作用することにより、家族ダイナミクスがポジティブな方向に作用していくということを学生は感じ取っていた。このような結果を踏まえ、家族の存在・役割・機能について、科学的・論理的に教育内容を整えて学習の方向づけをしていくことの重要性が明らかになった。

キーワード：家族、在宅看護、訪問看護、介護、家族のセルフケア、家族ダイナミクス

### I. はじめに

近年、診療報酬の改定、介護保険制度の導入により、入院期間の短縮化が進み、在宅療養者は増加傾向にある。それに伴い、在宅医療・看護・介護がますます推進され、より個別的・専門的な対応が不可欠となっている。看護教育においても1997年に看護基礎教育のカリキュラムに「在宅看護論」が組み込まれたことにより、在宅看護や在宅看護を実現する手段としての訪問看護の重要性が注目され、様々な形で講義・実習が行われるようになった。

在宅看護は、療養者とその家族の生活の場で行われており、看護者が療養者やその家族をどのように捉えるかで、提供されるケアは大きく変化する。看護者は、つねに療養者と家族を共に視野に入れ、看護の対象として位置づけ、看護を提供していく必要がある。しかし、看護は歴史的に「患者の背景としての家族」「社会的資源としての家族」として位置づけてきたため、患者を介して家族を理解していたにすぎなかった<sup>2)</sup>。

本学部において「在宅看護」は各看護領域の中でそれぞれの教育が行われており、一つの授業科目としては置

いていない。したがって、学生が家族を論理的・総合的にどのように捉えているかは明らかになっていない。そこで在宅看護実習の一環として行われている訪問看護実習の中で様々な療養者とその家族に関わることで学生は家族をどのように捉えたのかを明確にすることは、在宅看護実習における教員の取り組みを振り返るためにも重要であると考えられる。

### II. 研究目的

在宅看護実習の中に組み込まれている訪問看護実習において、学生が在宅療養している療養者との関わりを通して、家族をどのように捉えたのかを明確にし、今後の在宅看護実習の教育方法の方向性について検討する。

### III. 用語の定義

家族：夫婦・親子・血縁などの関係を持つ近親者が人格的に結びつき、感情的に共通なつながりをもって、家計をともしている社会的な1つの集団。<sup>3) 4)</sup>

社会資源：生活上の諸要求の充足や問題解決を目的と

して、利用できる各種の制度・施設・期間・団体および人々の知識、技術などの物的、人的諸要素を総称したものの。<sup>5)</sup>

家族のセルフケア：家族がその家族の発達段階に応じた発達課題を達成し、健康的なライフスタイルを獲得したり、家族が直面している健康問題に対して、家族という集団が主体的に対応し、解決し、対処し、適応していくように、家族が本来持っている機能を高めること。<sup>6)</sup>

家族の発達課題：家族がそれぞれの発達段階で責任をもって遂行しなければならないことで①生物学的要請、②文化的規範、③家族の抱負や価値の実現に関連している。<sup>7)</sup>

#### IV. 研究方法

##### 1. 研究対象

2001年5月7日から12月7日までの期間に実習した本学部3年生で承諾を得られた66名の在宅実習記録66部。

##### 2. 分析方法

「訪問看護実習のまとめ」に記載されている内容について、家族に関係する記述と判断したものを抽出し、抽出された記述をさらに文脈単位に整理し、その内容について分析した。

#### V. 在宅看護実習の概要

在宅看護実習は2週間（2単位 90時間）が当てられており、2週間のうち1週間（臨地実習は実質4日）は在宅療養者の訪問看護実習、あとの1週間（臨地実習は実質3日）は地域にある通所施設（知的障害児通園施設・精神障害者小規模作業所・身体障害者デイサービス・精神障害者デイケア等）においての実習が組まれている。

##### 1. 実習の目的・目標

###### 1) 在宅看護実習の目的

地域で生活しながら療養する人、または、障害を持ちながら生活する人と、その家族を理解すると共に、在宅での看護が実践できるために必要な知識・技術・態度が理解できる。

###### 2) 訪問看護実習の目標

- ①訪問看護の必要性と訪問看護の実際が理解できる。
- ②訪問看護の対象が理解できる。
- ③家庭環境が療養生活に及ぼす影響を知ることができる。
- ④社会資源の活用とその手段・方法が理解できる。

##### 2. 訪問看護実習の方法

訪問看護実習は、社会福祉法人の訪問看護ステーション4ヶ所、医療法人の訪問看護ステーション1ヶ所、病院内

の訪問看護室1ヶ所の計6ヶ所の訪問看護事業所で行った。1事業所に学生が2～3名配置され、教員は1～2ヶ所の事業所を巡回する形で学生と関わっていた。

学生の実習には、比較的家族関係が安定した療養者宅が選択された。訪問前に訪問対象者について情報収集をし、学生ごとに行動目標を記述したのち、訪問看護師と同行訪問する。学生の同行訪問する件数は実習4日間を通して6～8件となり、臨地実習最終日には臨地の実習指導者とともカンファレンスおよびまとめを行う。学内のまとめとして、同時期に実習を行った各グループによる合同発表会を行い内容の広がりや深まりを共有させた。

#### VI. 結果・考察

訪問看護実習のまとめの中で、学生が家族について捉えたと判断された記述例は表1のとおりである。

表1 「家族」について述べられた学生の記述例

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>① 対象者やその家族にも役割があり、対象者は再びその役割を果たせることを目的としたり、介護者である家族も役割を果たしながら、介護をしていかなければならないことを忘れてはいけないと思った。</li> <li>② 介護者には、介護者の生活があり、介護が全てではないということを忘れずに、また、自己の家族・夫婦に対する先入観を捨てて、ありのままのその家族を受け止めることがまずは大切なのだということがわかった。</li> <li>③ 病棟の実習に行った時に、退院という形をとる患者さんに対して、病気の治療だけに目を向けずに、その人は家に帰って「生活する人」であることに目を向けていきたい。そして、介護する家族にもそれぞれ自分の生活があるということを考えていきたい。そういう視点と心をもって病棟への実習につなげていけたらと考える。</li> <li>④ 私にとって、家族の誰かを在宅で見て行くということは自然なことであったため、病院から退院するときに家に帰ることができず、他の施設に移る患者さんを見て、納得することができなかった。しかし、この在宅実習を通して、家族の様々な事情や今までの背景を知っていく中で、家族には家族の抱えている問題があり、一概に家族ばかりを非難することはできないということに気づいた。</li> <li>⑤ 介護者のように毎日オムツ交換をしない家族に対して、介護に無関心で非協力的であると捉えてはならない。家族にもそれぞれ社会的な立場があり、オムツ交換のように目に見える形ではなく、経済面で支援をしている方もいるという視点で利用者を取り巻く家庭環境を見ていかなければならないことを学んだ。</li> <li>⑥ 指導や教育また家族、療養者の信頼関係の築きは、病院では短期間で行われるが、在宅では長い目でタイミングをつかみながら接していくことができるため、介護のズレがあっても徐々に家族の意識が変わっていくような働きかけをしていくことも必要である。</li> <li>⑦ 病棟では、やはり主体が看護婦になってしまいがちだが、在宅看護では主体が家族や療養者本人で看護・ケアに対しても選ぶのは家族・療養者本人だ。（中略）私は病棟実習で、</li> </ol> |
|--|

「患者さんに合った」という言葉をよく使っていたが、病院という空間はやはり非日常的なところで、「処置」という言葉が表に存在している。在宅看護は在宅という日常的な空間で、家族・療養者本人の意見・要望・希望を基に看護を行う。より療養者にあった、日常生活の1つとしてとらえることができると思う。

- ⑧ 社会資源もいろいろな選択肢を進めたりするが、強制せず、家族に決定権があり、意志意向を尊重していき、その後、選ばれた状況・条件の中で、最善の方法を探していくことが重要であるということを知った。
- ⑨ 療養者にとって家族は、今まで生活してきた人でもあり、心の支えでもあり、介護をしてくれる大切な存在である。だからこそ、在宅療養者がどうしたいのか、家族はどうしてあげたいのか、両者の思いが食い違わないように、在宅療養生活をしていかななくてはならないと感じた。
- ⑩ 老々介護（高齢者が高齢者を介護する）では、介護することを生きがいにする人もいることを知った。療養者は介護者に何かしてもらっているばかりでなく、介護者に何か大きな物を与えている場合があることを知った。
- ⑪ 対象者の方はそれまでの人生を家族と共に過ごし、それぞれの家庭の価値観の中で生活している方なのだとこのことを強く感じた。病院では1対1の関係であったとしても、対象者の方が、一步、病院の外へ出たら、そこには地域の中での対象者の生活がある。全ての環境（人や物）の中で、相互関係があって、その方が存在するという大きな視点で考えることが大切だということを学んだ。

これらの記述をさらに文脈単位に191件抽出し、分析対象とした。同じ内容と思われるものを統合した結果、89の小カテゴリー（以下の文中で〈〉に記述）、19の中カテゴリー（以下の文中で≪≫に記述）に分類した。さらに、これらは、【家族の価値観が介護に大きく影響している】【家族関係というものが重要な環境の一つ】【家族のセルフケア機能とセルフケア能力】【家族以外の支援を必要としている】【家族はそれぞれの発達段階や課題を持っている】【家族は介入に対して複雑さを呈している】の6つの大カテゴリーに集約された。（表2）

以下、大カテゴリーにそって記述する。

### 1. 【家族の価値観が介護に大きく影響している】

ここでは、中カテゴリーとして≪家族の時間的経緯の中での関係性が大きく影響する≫≪家族の性格や考え方が介護に大きく影響する≫≪家族の介護に対する受け止め方≫の3つからなっている。

≪家族の時間的経緯の中での関係性が大きく影響する≫には、〈介護には健康だった時の人間関係が大きく影響している〉〈家族には歴史があるから昔のことからアセスメントする必要がある〉などの小カテゴリーが含まれた。家族の表面だけを見るのではなく、家族が多くの時間的経緯の中で形成されていることを家族との直接的な会話や訪

問看護師の説明、カンファレンス等の中で結びつけることができたのではないかと考える。

≪家族の性格や考え方が介護に大きく影響する≫には、〈在宅療養では、介護者が療養者の生死・健康状態を大きく左右してしまう〉〈在宅介護の主体は家族であり、家族の協力が得られないと成り立たない〉などの小カテゴリーが含まれた。在宅生活では看護者の考えでなく、家族の考え方や意見を常に聞きながら、ケアや援助していたという経験から来ている。病院内でも、決して家族の考えを無視しているわけではないが場の違いから医療者中心になりがちで、家族の存在を「患者の背景としての家族」としか捉えることのできない現状を素直に感じたものであると考える。

≪家族の介護に対する受け止め方≫には、〈障害や在宅療養をするに至ったその状況を家族が受容するには長い時間がかかり、それを受容できるかどうか、受容できたかどうかによって介護する気持ちや介護力に差が生じる〉〈同じ介護負担であっても、介護したいと思っている介護者はそれほど大きい負担になっていないことを知った〉などの小カテゴリーが含まれた。介護していく中での家族の受け止め方で、同じような疾患を持ち、同じような家族構成であっても、介護方法やその目指す目標は明らかに違ってくることなどをいろいろなケースに訪問することで感じ取っている。

鈴木ら<sup>8)</sup>は「家族が信じるもの、価値を置いているものは、その家族や家族成員の行動にきわめて深く影響を及ぼしている。したがって看護者が家族のアセスメントをするには、この家族の価値観を理解することが不可欠である。」と述べている。在宅で介護する中で、決してケア提供者（訪問看護師・理学療法士・作業療法士等）主体ではなく、家族の価値観を考慮した上での関わりが行われていることを学生は捉えてきたと考える。その一方で記録に表現されていないが、学生なりに利用者に対して「もっとこうしてあげるとよいのに」と感じる場面も多く、ケア提供者側の価値観と家族の価値観との差に戸惑う学生もいた。

〈介護には健康だった時の人間関係が大きく影響している〉〈在宅介護の主体は家族であり、家族の協力が得られないと成り立たない〉などについて、自分がその立場であったらどうするかなどと合わせて、話し合うことにより、【家族の価値観が介護に大きく影響している】ことの意味について深めることができたグループもあった。

### 2. 【家族関係というものが重要な環境の一つ】

ここでは、中カテゴリーとして≪家族関係というもの

が重要な環境の一つ」≪家族の健康状態と介護≫の2つからなっている。

≪家族関係というものが重要な環境の一つ≫には、<すべての環境（人や物）の中で相互関係があってその方が存在する><主な介護者となる家族の生活状況（息抜きできるか、生活に充実感はあるのか、疲労感はどうかなど）が対象者に大きく影響する>などの小カテゴリーが含まれた。家族関係を環境と捉える学生もあり、住環境と同じように環境次第で在宅で生活できるか否かが決まってしまうほど家族の中で出来事に対する影響は療養者だけでなく、家族全体をも巻き込むほどの力を持っていることを捉えることができたのではないかと考える。

≪家族の健康状態と介護≫には、<介護者があってこそ、在宅で生活できるのであるから、介護者の健康状態について疲労具合についても把握し、サポートする><家族の健康を守ることが療養者の健康を守ることにつながる>などの小カテゴリーが含まれた。訪問看護師が療養者だけでなく、介護者や他の家族の体調も気遣う場面を経験することで家族の1人でも健康状態が保たれないと、環境である家族の役割が変化し、介護が継続しないこともあるという点で家族を環境と捉えたものと考えられる。

実習目標の中に「家庭環境が療養生活に及ぼす影響を知ることができる。」とあるため、療養者のADLにあった住環境や介護者の介護しやすい環境に注目する学生も多かった。しかし、前述のように家族を環境と捉えることで家族の変化は大きい影響を与えること、介護は決して介護者と療養者だけの問題でないことを感じ取っている。また、カンファレンスでは、その家族の環境がいろいろある、つまり様々な家族が存在することを改めて感じたなどの発言をする学生や【家族関係というものが重要な環境の一つ】ということを他の実習の中でも考えながら、生かして行きたいという学生もいた。

### 3. 【家族のセルフケア機能とセルフケア能力】

ここでは、中カテゴリーとして≪介護に自信をつける≫≪介護にやりがいを感じている≫≪主体としての家族≫≪家族が介護する上で支えになる≫の4つからなっている。

≪介護に自信をつける≫には、<介護者が自信を持って介護できるように支援していく><介護者が出来ない部分を看護者が補っていくことよりも介護者が無理なく行えるような関わりをしていた>などの小カテゴリーが含まれた。家族が自分たちなりの方法や道具を工夫して介護している姿を見て家族のやりやすい方法を見つけ出し、それを訪問看護師などが認めることで介護に自信

をつけ、それがいつまで続くか分からない介護を継続していくためには必要であると感じていた。また同時に、そのように≪介護に自信をつける≫ことが介護者をはじめとして家族自身の生活を守るためにも必要であるということが理解できたのではないかと考える。

≪介護にやりがいを感じている≫には、<介護を楽しんでいる><介護を生きがいとしている>などの小カテゴリーが含まれた。学生の中には、在宅療養は「暗くて寂しい」というマイナスイメージを持っており、介護を負担に思わず楽しんで行っている家族に出会うことで、在宅療養に対する考えがプラスに変わったという発言も聞かれた。しかし、そのような家族でも最初から≪介護にやりがいを感じている≫わけではなく、≪介護に自信をつける≫ことが家族でのセルフケア能力等をさらに向上させ、やがてそのような思いにつながってくるのだと感じ取っている。

≪主体としての家族≫には、<対象者や家族のニーズに出来る限り応えている><家族に決定権がある>などの小カテゴリーが含まれた。訪問看護師は家族に対して「これをして下さい。」という声かけはせず、「このような方法もあります。」という情報提供する形が多い。ケア提供者側に「やらされている。」のではなく、家族は提供された情報の中から自分たちで考え、「選択した」ものをケア提供者が行っているという状況を見ることで、家族で考える能力を備えることは在宅療養では重要な要素となってくることを感じていた。

≪家族が介護する上で支えになる≫には、<長期療養において家族は大きな心の支えであり、闘病生活の力となり、療養生活を支えている><療養者にとって家族は、今まで生活してきた人でもあり、心の支えでもあり、介護をしてくれる大切な存在である。だからこそ両者の思いが食い違わないようにしなくてはならない>などの小カテゴリーが含まれた。療養者にとって家族はなくてはならない存在であるが、介護者にとっても他の家族がいるからこそ、介護ができるということを感じ取っていた。また、その一方で記録では表現されていないが、家族がいることが介護する上で障害になる場合もあるということもカンファレンス等の中で発言している学生もいた。これは家族がいるからこそ、それぞれの考えが合わず、方向性が定まらないことがあるという経験からきたものだと考える。

鈴木ら<sup>9)</sup>は家族のセルフケア機能について「看護職が家族を変化させるのではなく、家族自身が変化していくような条件を整えることが看護職の役割である。」と述べている。様々な家族がいる中で、その家族に【家族のセル

表2 訪問看護実習において学生が捉えた家族

小カテゴリー	中カテゴリー	大カテゴリー
対象者と家族の関係性に注目する 介護には健康だった時の人間関係が大きく影響している 家族よって療養者の受け止め方はまったく違っている。その背景には、疾病・障害を持つ以前の関係が大きく影響している 家族には歴史があるから昔のことからアセスメントする必要がある	家族の時間的経緯の中での 関係性が大きく影響する	家族の価値観が介護に 大きく影響している
対象者はそれまでの人生を家族と共に過ごし、それぞれの家族の価値観の中で生活している方であった 在宅療養では、介護者が療養者の生死・健康状態を大きく左右してしまう 介護者の介護に対する思いは様々であり、介護者の性格や療養者との関係性だと思った 家族の協力体制がなければ、成り立たない 在宅で生活していくためには、家族のサポート体制が必要である 在宅介護の主体は家族であり、家族の協力が得られないと成り立たない 疾病や障害を受け入れて献身的に介護する人もいれば、何故やらなくてはならないのかと思う人もいる	家族の性格や考え方が 介護に大きく影響する	
障害や在宅療養をするに至ったその状況を家族が受容するには長い時間がかかり、それを受容できるかどうか、 受容できたかどうかによって介護する気持ちや介護力に差が生じる 同じ介護負担であっても、介護したいと思っている介護者はそれほど大きい負担になっていないことを知った 介護者は療養者の生活を成り立たせるためにはとても大切な存在 在宅療養する上での家族の存在が大きいことを学ぶことができた	家族の介護に対する受け 止め方	
主な介護者となる家族の生活状況(息抜きできるか、生活に充実感はあるのか、疲労感はどうか等)が対象者に大きく影響する すべての環境(人や物)の中で相互関係があってその方が存在する 介護に当たる人も1つの環境である 家庭環境は療養者が過ごしやすい環境である 家族関係というものが重要な環境の一つ	家族関係というものが 重要な環境の一つ	家族関係というものが 重要な環境の一つ
介護者があってこそ、在宅で生活できるのであるから、介護者の健康状態について、疲労具合についても把握し、サポートする 療養者のみの健康状態を観察するのではなく、その家族や介護者の状態を把握しながら、介護を継続していけるようにサポートしていた 療養者の状況を聞くだけでなく、介護者の体調を聞いたり、血圧測定をしていて、生活の場が家庭であるために家族を 十分把握していなければならぬことがわかった 家族の健康を守ることが療養者の健康を守ることにつながる	家族の健康状態と介護	
介護者が自信を持って介護ができるように支援していく 家族が知識を持つことで、療養者のありのままの姿を受け入れ見守りやすい 介護者が出来ない部分を看護者が補っていくことよりも介護者が無理なく行えるような関わりをしていた こちらが何かしてあげるのではなく、サポートするのだ 家族は疾患やそれより起こる症状を頭ん中では理解できている	介護に自信をつける	家族のセルフケア機能 とセルフケア能力
家庭関係が良い家は介護者の方も生き生きと介護している 介護を楽しんでいる 介護を生きがいとしている	介護にやりがいを感じて いる	
主となるのは本人・家族であって介護するのは家族である 対象者や家族のニーズに出来る限り応えている 在宅ということ、決定権があるのは、利用者であり、その家庭である 家族の希望にそって、家族が出来ないことを看護婦が行っていた 家族に決定権がある	主体としての家族	
在宅で生活している対象者にとって一番信頼しているのは介護者である 長期療養において家族は大きな心の支えであり、闘病生活の力となり、療養生活を支えている 療養者にとって家族は、今まで生きてきた人でもあり、心の支えでもあり、介護をしてくれる大切な存在である。 だからこそ、両者の思いが食い違わないようにしてはならない 家族は、ほとんどの方が、心配だけれども、療養者の現在の状況を受け止めきっていると感じた	家族が介護する上で支えに なる	
訪問看護が訪れるときは、介護者にとっても安心してできる時間であるが、一緒にケアに入ることが安心につながる人もいる 看護婦の訪問を心待ちにしているような印象を受けた 訪問看護婦の訪問を楽しみにし、精神的支えにもなっている 話すだけで心が楽になっている様子が伺えた 家族の本音や悩みが自然に話されていた 家族には言いにくいことを相談できる第三者的存在が必要 家族の不安の訴えを表出しやすい関係づくり 家族・対象者と向き合うことで、家族との関係性も深まり、家族も訴えを言いやすくなる	家族以外の支援者が必要と なる	家族以外の支援を必要 としている
介護者のライフステージによっても社会資源の内容も変化する 社会資源の活用が他の家族関係の維持・調整の役割も担うことが理解できた 介護者のために社会資源を活用することは、結果的には療養者のためになる	介護における社会資源の 重要性	
家族の経済状況と家族の思いを組み合わせると社会資源は提供されなくてはならない 家族の経済状況も考えなくてはいけない	家族の経済状況を知る	
家族にもそれぞれの社会的立場がある 様々な理由で社会資源を利用できない家族もある 家族の様々な事情や今までの背景を知っていく中で、家族には家族の抱えている問題があり、一概に家族ばかりを 非難することはできないと気づいた	問題を抱えつつも介護する	家族はそれぞれの発達 段階や課題をもって いる
家族に対して、介護されている苦勞をわかってあげる努力をする 24時間、一緒に過ごしているのは家族であり、家族は療養者の様々な場面に居合わせており、知識がないためにいろんな不安を抱えている 在宅では、介護者に疲労やストレスがたまることがほとんどである	不安・ストレスを感じつつ 介護している	
入院治療よりも家族の大切さ、絆を改めて感じる家族もある、一方で崩壊してしまう家族も存在している 長年にわたり在宅療養が必要となることが多く、介護者も複雑な心境を抱えている方が多いのではないかと 家族なのに「介護」という、人の世話をする特殊な関係になると人間関係が崩れたり、うまくいかななくなるといふ現実も知った 介護の思いにスレがあっても徐々に家族の意識が変わっていくような働きかけをしていくことも必要	介護によって変容する家族	

介護者にも生活や役割があり、自分の時間だって大切にすべきである 療養者だけでなく、家族もそれぞれのライフスタイルを持ちながら介護しているということを忘れてはならない 介護者の介護を尊重しながら、その家庭の介護が生活にあった 介護者には介護者の生活があり、介護がすべてではない 介護者にも生活があるので、そのことも尊重してあげることが大切 介護者にとって精神的安定が保てる時間を作ったりすることは介護者の人生をも尊重するという意味では重要なことである 介護は主として家族の生活の一部 療養者・家族も生活者である 介護者である家族は、家庭での役割を果たしながら、介護を続けて行かなくてはならないことを忘れてはならない	介護しながら、家族生活・役割を果たす	家族はそれぞれの発達段階や課題をもっている
家庭の人間関係が複雑だからといって修正するために関わることはできない。それだけ、家庭という空間には様々な価値観のもとに様々な思いがあると感じた 家族や本人の思いを裏切らないようにしたいが、それが不可能な時もある 療養者・介護者両方の思いを大切に考えて関わっていくようにしていた すべてを療養者・家族に合わせていくと、生命の危機、安全を守れなかつたりする為、利用者側の希望などをどこまで優先して、どこから制限していくのかのバランスを見極める必要がある 家族の理解を得るために、説明が必要であるが、時間や必要としていなかった場合、やりにくもどかしさがある 家族が介護の主となるので、介護者の思いや考えを取り入れながら、介護者と一緒に対象者の生活がよりよいものであり、その人らしく生活できるような援助や関わりをしていく 家族に対して指導口調ではなく、押し付ける態度は取らない	家族への介入の難しさ	家族は介入に対して複雑さを呈している
療養者も家族も否定できない ありのまま家族を受け止める 対象家族のすべてを受け入れることである 病院では、対象者の家族が隠れている	主体としての家族	
介護者も対象と考える 療養者を支える介護者も利用者と一緒に1組として捉える 介護者は100%必要であるので、看護は利用者介護者を1つとしてとらえていかなければならない 家族に対しても看護目標が立っていた 家族を巻き込んだ援助	家族を1組として捉える	

フケア機能とセルフケア能力】がどの程度あり、どのような関わり方をすることでその能力が機能するのか、看護者が重要な役割を果たしていることを感じ取っている学生もいた。

#### 4. 【家族以外の支援を必要としている】

ここでは、中カテゴリとして「家族以外の支援が必要となる」「介護における社会資源の重要性」「家族の経済状況を知る」の3つがあげられた。

「家族以外の支援が必要となる」には、＜訪問看護が訪れるときは、介護者にとっても安心できる時間であるが、一緒にケアに入ることが安心につながる人もいる＞＜家族には言いにくいことを相談できる第三者的存在が必要＞などの小カテゴリが含まれた。介護を継続していくには家族の力は不可欠ではあるが、ケア提供者などの第三者の力を借りて介護していくことも介護を継続し、家族関係を保っていくには必要であることを様々なケースから学び取っていた。学生の中にはケア提供者だけでなく、友人が家に来て話をしてくれる場面から隣人・友人等の地域の人と関わることも介護する上で励みになるのだとカンファレンスで発言していた学生もいた。家族以外でもいろいろな人の支援が重要になっていくことが理解できたと考える。

「介護における社会資源の重要性」には、＜介護者のた

めに社会資源を活用することは、結果的には療養者のためになる＞＜社会資源の活用が他の家族関係の維持・調整の役割も担うことが理解できた＞などの小カテゴリが含まれた。社会資源は現在、介護保険制度によりかなり整備されているが家族によっては、その利用方法は様々であることを学生は捉えてきている。社会資源を上手に組み合わせることで在宅生活が成り立っている家族、介護度が高い療養者であってもサービスは最小限であったり、その家族の生活状況・介護状況や考え方等に大きく影響されるため、十分に慎重に提供されるべきであるとも感じ取っている。

「家族の経済状況を知る」には、＜家族の経済状況と家族の思いを組み合わせると社会資源は提供されなくてはならない＞＜家族の経済状況も考えなくてはいけない＞などの小カテゴリが含まれる。施設内で看護する場合は経済的な問題は、ほとんど感じ取ることはできない。在宅生活においては、こちらがホストでなくゲストであるという立場から物品を使うなど家族に了解を得たり、社会資源においては利用者負担を考えると利用できないサービスがあったり、減免措置などの公的援助を受けることでサービスが利用できたり、その家族がどの程度経済力があるのか、介護にどの程度費用がかけられるのかも十分把握しなくてはならないことを感じたのである。

【家族以外の支援を必要としている】ということは、

人的支援だけでなく、経済的支援または考慮することが必要であると感じたのである。

##### 5. 【家族はそれぞれの発達段階や課題を持っている】

ここでは、中カテゴリーとして「問題を抱えつつも介護する」「不安・ストレスを感じつつ介護している」「介護によって変容する家族」「介護をしながら、家族生活・役割を果たす」の4つがあげられた。

「問題を抱えつつも介護する」には、「家族にもそれぞれの社会的立場がある」「家族の様々な事情や今までの背景を知っていく中で、家族には家族の抱えている問題があり、一概に家族ばかりを非難することはできない」等の小カテゴリーが含まれた。家族は家族なりの様々な問題を抱えており、それを乗り越えながら介護していることを訪問看護師等の説明や記録から読み取り、実感したと考えられる。また、学生の中には実習中に病院から退院する患者が家に帰れないことに対して「なぜこの家族は家で見てあげないのだろう。」と疑問を抱く体験をしており、それに対して、実際に家庭にいる家族をみることで様々な事情を考慮した上で退院先を考えなければならないことを知り、在宅生活という選択肢が必ずしも一番でなく、家族関係の問題で、施設が選択肢としてあがる場合もあることを理解できた学生もいた。

「不安・ストレスを感じつつ介護している」には、「24時間、一緒に過ごしているのは家族であり、家族は療養者の様々な場面に居合わせており、知識がないためにいろんな不安を抱えている」「在宅では、介護者に疲労やストレスがたまることがほとんどである」等の小カテゴリーが含まれた。介護するということは、不安やストレスを伴うものであり、それをどのように克服していくかは、家族によって違うことを感じ取っている。第三者が負担を軽減しようとするいろいろな社会資源を提供しても、家族がそれを拒否したり、利用することが返ってストレスになることも多い。

「介護によって変容する家族」には、「入院治療よりも家族の大切さ、絆を改めて感じる家族もいる、一方で、崩壊してしまう家族も存在している」「家族なのに「介護」という、人の世話をする特殊な関係になると人間関係が崩れてしまったり、うまくいかなくなるという現実も知った」等の小カテゴリーが含まれた。介護によって、今までにない課題が家族には出現する。それをどのように乗り越えるかが、家族に課せられた課題であると感じ取っていた。

「介護をしながら、家族生活・役割を果たす」は、「介護者にも生活や役割があり、自分の時間だって大切にすべ

きである」「療養者だけでなく、家族もそれぞれのライフスタイルを持ちながら介護しているということ忘れてはならない」等の小カテゴリーが含まれた。介護者を見る際に、どうしても介護を中心にしがちであるが、やはり介護者をはじめとして他の家族員も生活している人であって、介護ばかりしている訳ではない事を感じ取っていた。また、家族も様々なライフスタイルやステージがあるため、それぞれの持つ発達課題を達成していくことが重要であると感じている。

柳原<sup>10)</sup>は「病人・障害者を基点とした、その背景(保護者・介護者)としての家族ではなく、家族そのものを一まとまりのものとしてとらえ、そのメンバー1人ひとりがそれぞれの課題をもっており、家族そのものも課題をもってするという視点が必要である。」と述べている。学生は「介護者には介護者の生活があり、介護がすべてではない」など家族も介護が主ではなく自分たちと同じ生活する人だということは理解できていた。しかし、さらに家族には介護だけでなく様々な場面家族なりの発達段階や課題があり、看護者として、それを家族でどのように越えるのか見守り、サポートすることが大切であることを理解できた学生は少なかった。それだけ、【家族はそれぞれの発達段階や課題を持っている】ことを理解することは、難しいことだと感じた。

##### 6. 【家族は介入に対して複雑さを呈している】

ここでは、中カテゴリーとして「家族の介入の難しさ」「主体としての家族」「家族を1組として捉える」の3つがあげられた。

「家族の介入の難しさ」は、「家庭の人間関係が複雑だからといって修正するために関わることはできない。それだけ家庭という空間には様々な価値観のもとに様々な思いがあると感じた」「すべてを療養者・家族に合わせていくと、生命の危機、安全を守れなかったりする為、療養者側の希望などをどこまで優先して、どこから制限していくのかのバランスを見極める必要がある」等の小カテゴリーが含まれた。訪問看護師と同行し、同じ訪問看護師であってもその家にあつた声かけや態度など、家族を見極めた上で関わっている姿を見て、家族への関わり方の難しさを感じる事ができた。

「主体としての家族」には、「ありのまま家族を受け止める」「病院では、対象者の家族が隠れてしまっている」等の小カテゴリーが含まれた。在宅で生活している家族をそのまま受け止めることが介入には重要であり、家族を違う形で捉えたり、家族を変化させてしまうことがまた家族への介入を難しくするを感じ取ってい

た。また、病院実習の経験から家族を十分捉えることができずにいることが多く、病院の中でももっと家族を見なければという学生の思いも感じられた。

《家族を1組として捉える》には、＜療養者を支える介護者も療養者と一緒に1組として捉える＞＜介護者も対象と考える＞等の小カテゴリーが含まれた。いろいろな家族構成員がいる中で、訪問看護師の場合は主に療養者を中心に看護するが、療養者だけでなく介護者を始めとする家族も看護の対象と見ることが大切であることを感じ取っている。ケア提供者は家族を1組として捉えつつも、中立を保ち家族が納得いく生活になるように見守ることが必要であると考えている。

学生は訪問宅へ行き、話を聞く中で「もっとこうすべきだ。」「この家族を何とかしなくては。」という思いが強いことがわかった。しかし、訪問看護師は家族への介入に関しては、無理な介入はせずほとんど見守るという姿勢であった。それに対して、納得できない学生もいたが、たとえ介入しても、やはり第三者では解決できないことを学生なりに感じている。家族への介入は、慎重にすべきことであり、それは家族自体を守ること、しいては訪問看護師自身を守ることであることを助言した。そうすることで最終的には家族で考えなくてはいけない。「自己決定していくこと」、それが地域で生活するということを理解できた学生もいた。

石井<sup>13)</sup>は「看護職であっても他人の家族の中には土足で入れず、細心の注意を払ってかわりをもっているのが普通であると思う。看護はその人に生活を抜きにしては本当の意味では関われない。」と述べている。【家族は介入に対して複雑さを呈している】ということは、在宅に限らず、施設内看護においても十分言えることであり、その家族がどのように考えているのか等、十分に把握して慎重に対応しなくてはならないことを訪問看護師と家族の関わりを通して学習できたのではないかと考える。この経験をするかしないかで、やはり家族の捉え方は大きく違ってくるのではないかと感じた。

## Ⅶ. まとめ

訪問看護実習における学生の実習記録から、家族の捉え方について抽出し、分析した結果、学生は次のように家族を捉えている事がわかった。(図1)

- 1) 家族の存在を「患者の背景としての家族」と捉えるのではなく、時間的経緯の中で形成された存在であるため、家族の考え方や意見など【家族の価値観が介護に大きく影響している】。

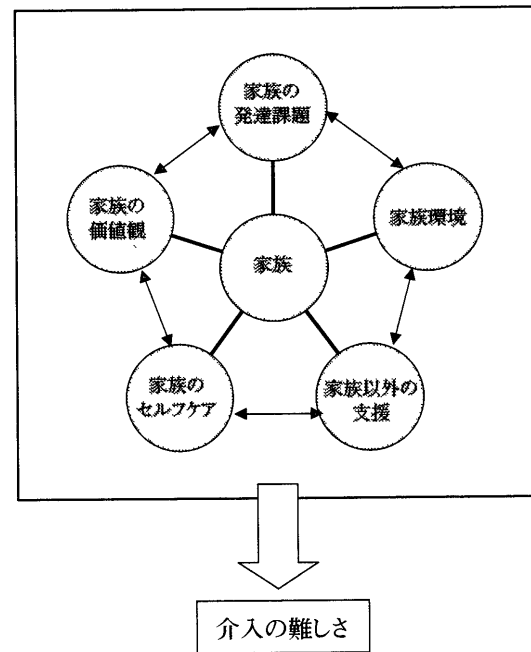


図1 学生が捉えた家族

- 2) 在宅で生活できるか否かが決まってしまうほど、【家族関係というものが重要な環境の一つ】となる。
- 3) 家族が【家族のセルフケア機能とセルフケア能力】を持つことは、介護者をはじめとして家族自身の生活を守るためにも必要である。
- 4) ケア提供者等の第三者や地域の人的人的支援及び、経済的支援など【家族以外の支援を必要としている】。
- 5) 介護によって、今までにない課題が家族には出現するなど【家族はそれぞれの発達段階や課題を持っている】。
- 6) 看護者が家族に対して介入の難しさを感じているように【家族は介入に対して複雑さを呈している】。

この6つの大カテゴリーは「家族ダイナミクスとは、個々の家族成員が相互に関連し合い、その相互関連性が新たな機能を生み出したり、逆に機能を低下させるというように常に変化し続ける動的な存在」とした時にそれを形成してく要素だと考える。

1つ1つのカテゴリーが円滑に相互作用することにより、家族ダイナミクスがポジティブな方向に作用していくということを学生は感じ取っている。このことを踏まえ、さらに家族の存在・役割・機能について科学的・論理的に教育内容を整えて、学習の方向づけをしていくことが重要であると考えている。

## Ⅷ. おわりに

本研究では、訪問看護実習における家族の捉え方について、学生の実習記録を分析したところ、6つの大カテゴ



りに集約された。これは、学生に指導する際の目安として使いやすい表現を試みたものである。分析については、研究者の主観が強く影響し、一般化することには限界があった。

在宅看護における家族の意味は、学生が捉えたものの他にも、社会を維持する人間を産み、まもり成長させる機能や文化を継承させる機能、社会的に容認される行動の規範を身につける基礎を培い、他人とのかかわりの基本的な態度を学ぶ機能<sup>12)</sup>など様々であり、高齢者世帯を多く訪問するという訪問看護の現状において、前述のことを何らかの形で補足していく必要があることを感じた。また、今回の家族の捉えかたの記述のほとんどは学生が直接、訪問先で見て感じてきたことであり、それをどのような形で記録の中に反映させ、カンファレンスの中で整理させるのか、訪問看護での家族の学びをどのように施設内実習や実践と結びつけるのかなど教員の関わりが重要になることを痛感するとともに、今後の課題であると感じた。

今回の研究における、この6つの大カテゴリーを目安にし、地域の通所施設実習の学びを加味しながら、在宅看護における家族の意味を学生と共に考え、さらにデータ分析に統計学的手法を活用し、信頼性・妥当性の高いものを模索していきたい。

#### 引用文献

- 1) 鈴木和子他著：家族看護学 理論と実践 第2版，日本看護協会出版会，1999.
- 2) 中野綾美：家族員の病気と家族の生活の質，臨床看護，25 (12)，1805-1809，1999.
- 3) 島内 節他編集：地域看護学講座 家族ケア，医学書院，1999.
- 4) 松野かおる他：系統看護学講座 在宅看護論，医学書院，2001.
- 5) 内蘭 耕司他監修：看護学大辞典 第4版，メヂカルフレンド社，1995.
- 6) 前掲 1)
- 7) Friedman, M. M. : Family Nursing, Theory and Assessment, Appleton & Lange, 1986.  
野嶋 佐由美監訳：家族看護学，へるす出版，1993.
- 8) 前掲書1)
- 9) 前掲書1)
- 10) 柳原清子：在宅看護論実習での核となる学習内容 訪問看護ステーションは何を学ぶ場なのか，訪問看護と介護，6 (8)，635-645,2001.
- 11) 石井享子：地域看護に活用する家族看護学，

Quality Nursing, 3 (4), 14-18,1997.

12) 前掲書4)

#### 参考文献

- 1) 長谷川ヤエ：訪問看護実習における学習の成果—学生の実習記録を通して—，東海大学短期大学紀要，25，159-166，1995.
- 2) 伊藤真由美他：看護における家族研究の現状と課題 看護独自の家族理論を開発するために，看護研究，22 (5)，62-77，1989.
- 3) 鈴木和子他：家族看護学教育のあり方についての提言，Quality Nursing, 3 (4)，8-13，1997.
- 4) 川越博美他：訪問看護ステーションにおける効果的な訪問看護実習のあり方の検討，聖路加看護大学紀要，25，25-40，1999.
- 5) 島田千恵子：看護学生の家族の捉えかた—2日間の訪問看護実習を通して—，順天堂医療短期大学紀要，12，14-24，2001.
- 6) 奥山則子他：訪問看護実習の意義と問題（第2報）—記録物・レポートからみた学生の学習内容の分類—，東京都立医療技術短期大学紀要，5，57-64，1992.
- 7) 村山正子他：訪問看護実習の意義と問題（第3報）—実習指導方法の工夫とその効果—，東京都立医療技術短期大学紀要，6，1-10，1993.
- 8) 荒川靖子他：終末期患者の家族に対する看護 家族ダイナミックスの看護介入のあり方，看護研究，22 (4)，35-53，1989.